

〔研究報告〕

## 高機能自閉スペクトラム症（ASD）の母親とその子どもが「育てられた」「育てる」経験を通して紡ぐ関係性

加藤 まり<sup>1)2)</sup> 門間 晶子<sup>3)</sup>

### 要 旨

本研究の目的は、高機能自閉スペクトラム症（ASD）の母親とその子どもの「育てられた」「育てる」経験を通しての互いに「関係を紡ぐ」経験を明らかにし、母親にASDがあるがゆえの子どもと紡ぐ関係の特徴を考察することである。方法は、ASDの母親5名とその子ども2名に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。その結果、ASDの母親の「育てられた」経験から得た子どもを「育てる」経験は、【親はちゃんとした人に育てようとした】【親に頼りがたい】【手探りで「自分なり」に子育てをする】【親と似た部分もある】の4つのカテゴリ、母親が子どもと「関係を紡ぐ」経験は、【子どもの無関心さや言動に複雑な心情を持つ】【自分の特性で子どもを困らせているかもしれない】【自分の頑なさや苦手さよりも、子どもの心を軽く扱わず接する】【安らぎのある対等な関係で過ごす】【子どもの考えや選択を尊重し、社会の中で歩めるよう支える】の5つのカテゴリにまとめられた。子どもが「育てられた」経験を通してASDの母親と「関係を紡ぐ」経験は、【互いの特徴による困りごとを支えあい心の穏やかさを保つ】【母親や周りに複雑で心許ない思いがわく】の2つのカテゴリにまとめられた。

ASDの母親と子どもが紡ぐ関係の特徴は、互いの生きづらさを思いやり支えあうと同時に、自分の親に対して批判的な気持ちを抱くというアンビヴァレントな複雑さであった。母親と子どもの関係を支援するためには、従来からの支援に加え、親子や親子に関わる人々との対話により、多様な見方と互いに理解を深める支援が必要と考えられた。

キーワード：高機能自閉スペクトラム症、母親と子どもの経験、子育て、関係を紡ぐ

### 1. 緒 言

近年、社会の中で発達障害に対する認識が高まり、大人になってから診断を受け、自身の発達障害と付き合いながら子育てをする親がいる。成人における自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）の有病率は、海外では2007年のイギリスの研究によると千人中9.8人（Brugha, McManus, Bankart et al., 2011）、2018年のアメリカの調査（CDC, 2021）では8歳以上で千人中23.0人と報

告されている。我が国では、成人の有病率は明らかではないが、幼児のASDの有病率は3%を超えることや、ASDと診断される幼児の割合は増加傾向であると報告されている（Saito, Hirota, Sakamoto et al., 2020；Sasayama, Kuge, Toibana et al., 2021）。厚生労働省の患者調査によると、診断やカウンセリング等を受けるために医療機関を受診した発達障害者の数は、平成20年度の約9万人から平成29年度では約23万人と大きく増加しており（厚生労働省, 2019）、自らの発達障害と付き合いながら子どもを育てる親がいることが推測される。

我が国では発達障害者支援法において、それぞれの障害特性やライフステージを通じた切れ目のない

1) 金城学院大学看護学部

2) 名古屋市立大学大学院看護学研究科博士後期課程

3) 名古屋市立大学大学院看護学研究科

支援が求められるようになり、子育て世代にある発達障害者への支援の充実が求められるようになった。また母子保健の分野では、「すべての子どもが健やかに育つ社会」の実現を目指す国民運動として、健やか親子21が推進され、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」を重点課題の一つに挙げ、親子それぞれが発信する様々な育てにくさに寄り添う支援の充実に取り組んでいる（こども家庭庁, 2023）。しかし、ASDは「社会性」「コミュニケーション」「想像力」などの障害特性（Wing／久保, 佐々木, 清水, 1998）により、当事者も周囲の人々も互いに「関わりにくさ」を感じる傾向があるために、自らの親や支援サービスとの関係の不調和から閉塞的な養育を招きやすいと言われており（浅井, 杉山, 小石, 他, 2005；飯田, 佐藤, 2013；岩田, 2015）、当事者の人間関係や困りごとに配慮した子育て支援が必要である。また、海外ではASDに関する性差を考慮した診断や支援が注目され、ASDの女性の生活や診断の経験に注目した研究（Milner, McIntosh, Colvert et al., 2019；Webster, Garvis, 2017；Tint, Weiss, 2018）は見かけるものの、社会的規範や役割期待の文脈からASDがある女性のライフコースに関する研究やASDの母親の子育て経験に関する研究（Pohl, Crockford, Blakemore et al., 2020；Taylor, DaWalt, 2020）は数少ない。著者はこれまでに、ASDの母親の語りを通して、母親自身が経験している子育ての特徴を明らかにした（加藤, 門間, 山口, 2020）。この研究でASDの母親は、“世間並み”でありたい苦悩と孤独を抱える精一杯な子育てから、ASDがある自分と折り合うにつれ、親子のありのままを尊ぶ子育てをしていた。しかし、ASDの母親の子育て支援を考えるためには、親側の視点だけで論じるのは十分でない。今まさに育てられている子どもが母親との関係をどう捉え紡いでいるかを知り、子育ての特徴と親子の関係に基づいた支援を提案する必要がある。また、子育てとは親子関係を基本としつつ、家族や周囲の人との相互作用のなかで社会的に構成されるもの

（McNamee, Gergen, 1997）である。つまり、周囲の人との関係を通して意味を作り出しながら育まれるものとして、子育てを捉え支援を考える必要がある。そこで本研究では、ASDの母親とその子どものそれぞれの「育てられた」「育てる」経験と互いに紡ぐ関係に焦点を当てる。

## II. 研究目的

本研究の目的は、高機能自閉スペクトラム症（ASD）の母親とその子どもの「育てられた」「育てる」経験を通しての互いに「関係を紡ぐ」経験を明らかにし、母親にASDがあるがゆえの子どもと紡ぐ関係の特徴を考察することである。本研究により、ASDの母親の子育てと親子関係を多角的に解釈し、その特徴を考慮した支援のあり方や方法を提案できると考える。

## III. 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究における用語の定義は以下のとおりである。

「関係を紡ぐ」とは、母親と子どもが互いの関係を生み出しつなげることとした。

「高機能自閉スペクトラム症（ASD）の母親」とは、明らかな知的障害を伴わない自閉スペクトラム症の母親のことであり、知的遅れがなく言語能力があるために大人になるまで気づかれず、子育てや就業を通して診断に至った母親である。

### 2. 研究デザイン

ASDの母親やその子どもの「育てられた」経験に対する受け止めや、自身や相手をどのように理解し関係を紡いでいるかについて、母親や子どもが語る文脈から理解するために質的記述的研究を採用した。

### 3. 研究協力者

#### 1) ASDの母親

自身がASDと診断されており、13～22歳までの

子どもを育てている母親を研究協力者とした。子どもの年齢を設定した理由は、母親が子どもとの関係を紡ぐために、ある程度の期間を過ごしていると考えたためである。研究協力者の募集は、近隣県の当事者会メンバーや知人の紹介により関係づくりをして研究協力が可能な母親を募った。最終的に研究協力を承諾した母親は5名であった。

ASDと診断され、さらに限定された年齢の子どもを育てている研究協力者を得ることが難しかったことや、ASDの母親の経験に焦点を当てるため、子どもの発達障害の有無は特に問わなかった。

## 2) ASDの母親の子ども

本研究におけるASDの母親の子どもを研究協力者とした。募集については、母親に子どもの研究協力の可能性について打診し、母親から可能性ありと回答を得た場合には、子どもを強制しないように配慮しながら研究協力への意向確認をしていただけるよう依頼した。拒否しなかった子どもには、母親同席のもとで研究について説明し、子どもの承諾後にインタビューをした。最終的に子どもの研究協力者は2名であった。

## 4. データ収集方法

### 1) インタビューの場面設定とすすめ方

研究協力者である母親や子どもの経験と意思を十分に伺うため、半構造化面接を用いた。2021年4月から9月にかけてデータ収集を行った。面接方法として、新型コロナウイルス感染症対策が必要な状況から、研究協力者に対面かオンラインの希望を聞き場面設定をした。対面の場合は、研究協力者が希望する日時と場所で感染予防対策をしながら実施した。オンラインの場合は、研究協力者が使用するインターネット環境を確認し実施した。面接回数について、対面では研究協力者の外出機会を可能な限り減らすために1回とし、途中で休憩をはさみ疲労に留意しながら実施した。オンラインでは研究協力者の疲労に配慮し、概ね60分のところで改めて面接することにして2回実施した。2回目は、1回目の記憶が薄れない2週間以内に設定した。

研究者から研究協力者であり子どもの代諾者でもある母親に、研究目的や調査の概要、倫理的配慮について説明し、同意を得たうえでインタビューガイドに基づき進めた。インタビューの内容は、研究協力者の許可を得てICレコーダーで録音およびフィールドメモで研究目的にかなうと思われる研究協力者の言葉や研究者の感想などを書き留めた。

### 2) 母親へのインタビュー内容

親から「育てられた」経験と子どもを「育てる」経験について、様々な場면을想起していただきながら、以下のことをインタビューした。

- ①自らの親から「育てられた」経験に対する受け止め
- ②親に「育てられた」経験と子どもを「育てる」経験の関係
- ③子どもとの関係を紡ぐために大切にしていることや工夫
- ④子どもとの関係に対する思い

### 3) 子どもへのインタビュー内容

子どもに対しては、母親と関わる様々な場면을想起していただきながら、以下のことをインタビューした。

- ①自身から見ての母親の紹介
- ②日頃の母親との関わり（会話・スキンシップ・習慣など）
- ③母親に気持ちを分かってもらえ、思いやってもらえたエピソード
- ④母親との関係を紡ぐために大切にしていることや工夫
- ⑤母親との関係に対する思い

## 5. データの分析方法

本研究は、ASDの母親やその子どもの経験から互いの関係の特徴を見出すために、質的記述的研究方法を選択した。まず、録音したデータとフィールドメモをもとに研究協力者それぞれの逐語録を作成した。次に、ASDの母親の逐語録から親に「育てられた」経験と自分が子どもを「育てる」経験、子どもの逐語録から「育てられている」経験に着目し、逐語録を繰り返し読み文脈を重視しながら、自

分や相手に対する理解や関係を紡ぐことに関する語りを抽出し、簡潔なコードを作成した。続いて、類似した意味内容をもつコードをまとめサブカテゴリを生成し、さらに同様の作業によりカテゴリを生成した。

分析結果の厳密性の確保（グレッグ，麻原，横山，2018）について、確実性としては研究協力者に分析結果を示し確認と意見をいただくメンバーチェックングを得た。適用性については、分析プロセスや結果を可能な限り詳しく記述した。真実性については、データから抽象度を上げサブカテゴリやカテゴリを生成するプロセスを質的研究の経験を積んだ公衆衛生看護学の研究者のスーパーバイズを受け、本研究に従事しない複数の研究者との意見交換を行った。

#### 6. 倫理的配慮

研究協力者であるASDの母親に対しては、口頭および文書により、研究の主旨、研究協力の自由意思や撤回の自由の保障、個人情報取り扱いの徹底について説明した。ASDの母親の子どもには、「子どもを対象とする看護研究に関する倫理指針」（日本小児看護学会，2015）に基づき、研究の目的、動機、意義、調査内容、倫理的配慮などについて説明し、意思確認を十分に行ったうえで研究協力の承諾を得た。本研究の子どもの研究協力者は高校生以上

であったためインフォームド・コンセントを受けた。

それぞれの研究協力者に対し事前に同意書を郵送し署名を得たほか、調査の当日にも改めて説明し同意を確認した。面接では対面やオンラインに関わらず、研究協力者の心身に無理がないよう声掛けし、途中で休憩を挟みながら疲労しないように実施した。

本研究は、名古屋市立大学大学院看護学研究科の研究倫理委員会の承認を得て実施した（ID番号：20014-4）。

## IV. 結果

### 1. 研究協力者の概要

研究協力者はASDの母親5名、その子ども2名の計7名である。ASDの母親と子どもの概要および面接の状況は表1のとおりである。

#### 1) ASDの母親の概要

母親の年齢は面接時点で39～54歳であった。具体的な診断名は、アスペルガー症候群が1名、自閉スペクトラム症およびADHDの合併が2名、広汎性発達障害およびADHDの合併、アスペルガー症候群とADHDおよび学習障害の合併が各1名であった。診断を受けた契機は、子どもの診断が3名、産後うつによる受診が1名、職場の同僚の勧めが

表1. 研究協力者の概要および面接の状況

	ASDがある母親の状況			子育ての語りの対象児と家族の状況			母親の面接の状況		子どもの面接の状況	
	年代	診断から面接までの期間	診断名	対象児の年代*	発達障害の診断	世帯の特徴	所要時間	方法	所要時間	方法
A氏	40代	7年	自閉スペクトラム症 ADHD	10代	なし	三世帯世帯	62分 68分	オンライン (自宅の部屋)	75分	オンライン (自宅の部屋)
B氏	40代	11年	アスペルガー症候群	20代	あり	核家族世帯	49分 63分	オンライン (自宅の部屋)	—	—
C氏	50代	12年	広汎性発達障害 (ASD) ADHD	20代	あり	核家族世帯	62分 52分	オンライン (自宅の部屋)	67分	オンライン (自宅の部屋)
D氏	30代	14年	自閉スペクトラム症 ADHD	10代	なし	核家族世帯	123分	対面 (大学演習室)	—	—
E氏	50代	5年	軽度聴力低下 アスペルガー症候群 ADHD 学習障害	20代	あり	核家族世帯	78分	対面 (N市内飲食店)	—	—

\*下線は研究協力者（母親の子ども）である

1名であった。治療については、通院中が4名、通院なしは1名で、2名は内服治療中で3名は経過観察中であった。就業状況は、雇用形態の違いはあるが全員が就業していた。

面接の所要時間は平均111分であった。面接方法は、自らの特性などにより対面を希望した者は2名、新型コロナウイルス感染症対策のためオンラインを実施した者は3名であった。なお、研究に関する事前説明において口頭と書面の内容を理解されたこと、研究者とのコミュニケーションでも特に知的障害を感じさせる方ではなかったことから、目的にかなった研究協力者が得られたと判断した。

## 2) 子どもの概要

子どもの年齢はインタビュー時点で、10歳代の学生が1名と20歳代の社会人が1名であった。発達障害の有無については、診断なしと診断ありがそれぞれ1名であった。面接の所要時間は、それぞれ75分と67分であり、2人ともオンラインで1回実施した。

## 2. ASDの母親とその子どもが関係を紡ぐ経験

ASDの母親とその子どもが関係を紡ぐ経験について、母親の子育ての背景となる『ASDの母親の「育てられた」経験から得た子どもを「育てる」経験』、母親が子どもと関わることから受け止めた『ASDの母親が子どもと「関係を紡ぐ」経験』、子どもが母親に「育てられた」経験を通して受け止めた『子どもが「育てられた」経験を通してASDの母親と「関係を紡ぐ」経験』の3つの経験から捉えた。

分析により抽出されたカテゴリを【】、サブカテゴリを〔〕で示す。斜体文字は実際の語りを示し、意味が通じやすいように必要に応じて（ ）内に字句を補った。

『ASDの母親の「育てられた」経験から得た子どもを「育てる」経験』について、カテゴリとサブカテゴリおよびコードの一覧を表2-1に示す。4つのカテゴリが生成され、【親はちゃんとした人に育てようとした】【親に頼りがたい】【手探りで「自分なり」に子育てをする】【親と似た部分もある】とい

う経験であった。

『ASDの母親が子どもと「関係を紡ぐ」経験』について、カテゴリとサブカテゴリおよびコードの一覧を表2-2に示す。5つのカテゴリが生成され、【子どもの無関心さや言動に複雑な気持ちがする】【自分の特性で子どもを困らせているかもしれない】【自分の頑なさや苦手さよりも、子どもの心を軽く扱わず接する】【安らぎのある対等な関係で過ごす】【子どもの考えや選択を尊重し、社会の中で歩めるよう支える】という経験であった。

『子どもがASDの母親と「関係を紡ぐ」経験』について、カテゴリとサブカテゴリおよびコードの一覧を表3に示す。2つのカテゴリが生成され、【互いの特徴による困りごとを支えあい心の穏やかさを保つ】【母親や周りに複雑で心許ない思いがわく】という経験であった。

### 1) ASDの母親の「育てられた」経験から得た子どもを「育てる」経験

#### ①親はちゃんとした人に育てようとした

このカテゴリは、〔親はちゃんとしていた〕と〔親は意に沿う振る舞いを厳しく求めた〕という2つのサブカテゴリから構成された。

#### a. 親は全てに手抜きせずちゃんとしていた

母親にとっての親は、仕事や家事や子どもの世話などに手を抜くことがなく、敵わないほどそつない様子であったことが語られた。

母もフルタイムでずっと働いて、かなり頑張ってたんですけど。手を抜かないというか、お弁当も家のご飯も必ず作ってくれて、本当にちゃんとしてて。ちっちゃい頃は私が寂しくないように家に帰ると置き手紙が普通にあって、ご飯食べてねだけじゃなく遊び心があって、1つ目の手紙が机の上にあるんですけど、2つ目はたんすの引き出しに、次はテレビの裏にという感じで、わくわく感を持たせてくれることが日常的にあったので退屈しない鍵っ子だった。(B氏)

表2-1. 高機能自閉スペクトラム症の母親の「育てられた」経験から得た子どもを「育てる」経験

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
親はちゃんとした人に育てようとした	親は全てに手抜きせずちゃんとしていた	親は私と違い何でもでき、私にも小言を言いつつ身の回りを世話してくれた
		親は私の好きなことに関心をもち、一緒に過ごす関わりを持ってくれた
		親は仕事も家庭も手を抜かず、鍵っ子の私が寂しくないよう工夫していた
	親は厳しく、意に沿うように求めた	親は私になんでもできるよう厳しく、怯えながら期待に応えようと頑張った
		親は私の希望や選択よりも自分の思いを優先し、意に沿わないと機嫌を損ねた
親に頼りがたい	私は大切なのか悩ましく、孤独で複雑な気持ちがした	母は私が伝える出来事や気持ちや主張にうんざりし、取り合わないため寂しかった
		母が兄弟や他所の子を好いているように見え、孤独で拗ねていた
	親に弱みや甘えを見せられず、自立した人として振る舞った	親とは愉快に話す奥にある、弱みや甘えを見せない大人同士の関係だった
手探りで「自分なり」に子育てをする	親のようにとは思えず、自分で考え子育てする	親の子育ては立派と思うが、同じようにしようと思わないし見習えない
		親と比べて適当かもしれないが、自分なりのやり方で子どもと関わる
		親にしてもらったよりも、してほしかったことを心がけ子どもと接する
		子育てから自分の育てにくさや親の苦勞に気づいた反面、忘れがたい否定された思い出に、親のようになりたくない、なれないと思う
		子どもは可愛いが接する術がわからず、とりあえず敬語で話しかけ歌いかけて過ごしていた
親よりも周りを見ながら子育てする	親よりも普通の子育てをしたであろう他の母親を見ながら子育てをした	親より祖母から教えられたことの影響を受け、善悪や思いやりを子どもに伝える
		子育てに自信がなく追い込まれた気持ちを専門家に強く支えられた
親に似た部分もある	考えてみれば親に似た子育てをしている	子どもが失敗も含め経験から学ぶようにと親が責任を持つことは、親から学んだ

## b. 親は厳しく、意に沿うように求めた

母親にとっての親は、学校や日常生活で親の意に沿うことを求め、期待通りでないと機嫌を損ねた。そのため母親は、親の思いに応えようとしたり、やりたいことを諦めたりしてきたことが語られた。

箸の上げ下げからお手伝いも、机を丸く拭いたりするといきなり怒鳴られたり。(略)父は常に怒鳴ったり叩いたりするので、びくびくしながら過ごした感じ。(略)自分で言うのもあれですけど、(私は)なんでもできる子だったので、できて当たり前で。1回100点取ったら現状維持して当たり前で。(略)私的には期待に応えようと頑張ったというのはあったんですね。常に。(B氏)

母がいつも口にしてたのは、親の言うことを聞かへ

ん子は幸せになれへんって。(私は親と)真逆なんですよ、性格とか。(略)だから若い頃、私が休みの日に友達と出掛けると、ものすごく不機嫌なんですよ。(略)親の言うことが全て正しくて、あなたはそれに反発して生きてきたから人生で失敗するって。(C氏)

## ②親に頼りがたい

このカテゴリは、〔私は大切なのか悩ましく、孤独で複雑な気持ちがした〕と〔親に弱みや甘えを見せられず、自立した人として振る舞った〕という2つのサブカテゴリから構成された。

a. 私は大切なのか悩ましく、孤独で複雑な気持ちがした

親や周囲に理解され受け入れられたかったが、取り合ってもらえた感覚が得にくく、孤独や拗ねる気持ちであったことが語られた。

表2-2. 高機能自閉スペクトラム症の母親が子どもと「関係を紡ぐ」経験

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	
子どもの無関心さや言動に複雑な気持ちがする	子どもの気遣いのない言動にストレスを感じる	子どもは自分にしか興味がなく、相手の話に関心がないためストレスを感じる	
		世話に時間や心を尽くしても、関心も労いもない子どもの姿に奴隷のようだと感じた	
	子どもに昔の自分が重なり複雑な気持ちになる	自分に注目してほしいと求める子どものアピールが、毎日続き疲弊した	
		自分と同じ特性がある子どもへの懸念から、叱ることをためらう 子どもの感情的な言動や不器用さが自分を見ているようで複雑に感じる	
自分の特性で子どもを困らせているかもしれない	自分のペースは変え難い	子育ては自分のペースが保てずしんどい気持ちになる 予定を変更され混乱すると気持ちを切替えられず、子どもにしつこく言ってしまう	
		子どもの心情や状況をイメージするのは難しい 私の感覚とは違う子どもの言動に戸惑う 子どもの置かれた状況を表情や言葉から読み取るのは苦手	
	子どもを困らせているかもしれない	私は他人にストレスを与えるため、子どもにも困らせているのではと申し訳なく思う 私の心身の不安定さが、子どもに甘えることを諦めさせ無理をさせたと思う	
自分の頑なさや苦手さよりも、子どもの心を軽く扱わず接する	自分の頑なさを解き、子どもに通じる距離やタイミングを身につけ待つ	子どもの特性に思春期が重なりぶつかったが、時を経て適度な距離を身に着けた 子ども中心の生活にこだわったが、心を切り替え仕事を始めると子どもの態度が変化した 子どもの心の疲れのサインに対し、距離を保ち助言を聞き入れてくれるタイミングを待つ	
		子どもの特徴やパターンを覚え接する	子どもの生活リズムや会話の特徴をつかみ、話ができる時間の中で聞き相談事にのる 子どもとの出来事や子どもが示すパターン、子どもの臭いの変化から状況をつかみ対応する
			子どもの心の苦しさを軽く扱わず接する
	安らぎのある対等な関係で過ごす	私の特性に合わせ支えてくれる	子どもは、私を支え相談に乗ってくれて頼りになる 子どもは私の気持ちの切り替え方を心得て、違う話題でかわしてくれる 子どもの年代の発達障害者からの相談に、子どもの経験や意見を聞くことが増えた
			他人には警戒する私たちがだが、お互いは安心でき素直でいられる
子ども自身の人生を尊重し、社会の中で歩めるよう支える		子ども自身の人生に自信を持って進んでほしい	
			子どもが自律し社会に馴染めるよう、自分の経験をもとに助言する 自分の経験を伝えることで、気兼ねなく相談しやすい雰囲気を作る 子どもは人との距離感という目で確認し難いことが苦手なため、自律した人間関係が大事と伝える 子どもが経験している社会の中での矛盾や悩みに対し、自分の経験をもとにアドバイスする

表3. 子どもが「育てられた」経験を通して高機能自閉スペクトラム症の母親と「関係を紡ぐ」経験

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
互いの特徴による困りごとを支えあい心の穏やかさを保つ	丁寧な互いの特徴と対処を伝え支えあう	互いに自分の特徴を細かく伝えあい、次第に対処を分かりあう
		互いに時間をかけ試行錯誤しながら、少しずつ理解しうまくいくことが増えてきた
		自分と母親は補いあう関係であり、母親から丁寧にサポートされている
		母親が混乱しないように、日ごろから細かく説明する
特性による母親のストレスを予測し支える	家族から母親との信頼関係へのコツを教わり、関係に活かす	母親は情報の整理や管理が苦手なため、私はぬかりがないよう心がける
		母親の特性を支えるのは、母の心が落ち着くことで私も穏やかでいられるためである
		母親の特性を支えるのは、母の心が落ち着くことで私も穏やかでいられるためである
自分を支えてくれる母親を頼りに心の穏やかさを保つ	友達や周囲の人は信用できないが、母親には全部話して大丈夫と思う	母親は私の性格に合わせ、話を聞いて考えてくれ信頼できる
		友達から聞く親との関係みたいではないが、自分と母親は今のままが落ち着く
		友達や周囲の人は信用できないが、母親には全部話して大丈夫と思う
母親や周りに複雑で心許ない思いがわく	母親や周囲にとっての自分の存在が気にかかる	母親と家族の間を取り持つが解決にならず疲れる
		友達や周囲の気持ちを想像すると学校が怖くて疲れる
		周りが私よりもASDの母親を応援するため、複雑な気持ちだった
		悩みの深刻さが伝わらないのは母親の特性や友人ではなく自分のせいだと気づいた
母親のASDゆえの言動に温かな思いと批判的な思いがわく	母親のASDゆえの言動に温かな思いと批判的な思いがわく	周りの人の気持ちを気に留めない母親に批判する思いとうらやましい思いを持つ
		理想的な母親に感じる時と気分の波を感じる時があり、その時々で関係が変わる
		世間の常識への違和感を言葉を変え伝えるが、母に伝わらずもどかしかった

母親、信用してないって言ったら変ですけど、あんま好きじゃなかった。(でも、)本当は大好きだったと思います。将来は面倒を見なきゃと思ってたので。でも、おかんは私のことを好きじゃないんだろうなと思って生きてきた。(略)私が1年生のとき、母は職場に妹を連れて行ってたので、私だけハバケ(仲間はずれ)になってるって思ってたんですね。(E氏)

b. 親に弱みや甘えを見せられず、自立した人として振る舞った

親の望みや多忙な状況に応えるために、日常の悩みや弱音などのネガティブな部分を見せず、自分のことは自分で解決できると振る舞ったことが語られた。

(親に)悩み相談ってあまりしたことがなくて、いわゆる雑談はしてたんですけど。私は小・中学校でいじめにあってるんですけど全く親には相談して

いなくて。(略)自分が困ってる状況を伝えづらかったんですね。子ども心に弱みを見せたくないみたい。(略)母親の前で泣くこともあまりなかったですし、お母さん好きよって甘える感じもなかったですし、大人と大人の付き合いみたいな感じだったですね。(B氏)

③手探りで「自分なり」に子育てをする

このカテゴリは、[親のようにとは思えず、自分で考え子育てをする]と[親ではない周りを見ながら子育てをする]という2つのサブカテゴリから構成された。

a. 親のようにとは思えず、自分で考え子育てをする

親は懸命に自分を育てていたと思う反面、自分の子育ての参考になる部分はないように感じ、自分なりに考え子育てをしてきたことが語られた。

(子どもとの関係をつくるのは、自分で)考えながら、親にしてもらったことを意識してはないです

ね。別にいろいろしてもらってたし、全然しゃべってないこともないけど。こう親がしとったで、自分もそうしていきたい見習ってなん（てこと）は全然できないですね。すご過ぎて。（A氏）

（我が子と）とても似てるので、私はこれぐらい育てにくい子どもやったんやろなと思うんです。だけど本当に母が全て反面教師です。すごいづらかったんで、ずっと。ああいうお母さんにはなりたくないっていうか、なれないし。（C氏）

#### b. 親よりも周りを見ながら子育てする

親の子育てよりも垣間見る他の母親の子育てや、友人や祖父母、支援者などからの助言を参考に子育てをしてきたことが語られた。

私、子育て観がないわけですよ。まともな状況って言ったらいいんですかね、周りのお母さんたちみたいな育ち方してないから。（略）（親は）参考にならないから周りのお母さんを見ながらやってたら（夫に）怒られて。自分でやらな意味ないよなって。（D氏）

思考っていうか考え方とか善悪とかって、じいちゃんに教わった部分がすごく多くて。（略）いろいろ教えてもらった記憶はあって。それが私の子育ての基本になっているのかもしれない。母との関係よりは、じいちゃんばあちゃんとのことで覚えているので良かったのかな。（E氏）

#### ④親と似た部分もある

このカテゴリは、〔考えてみれば親に似た子育てをしている〕というサブカテゴリから構成された。

##### a. 考えてみれば親に似た子育てをしている

親の子育ては参考にならないと思ってきたが、子どもが失敗を含め経験から学ぶようにと考えるところは自分の親に似ていることが語られた。

（子どもは）経験させないと分かんよねってことで。（私は）けつ拭いたるから行けよってタイプなんで。（略）そういえば、母親から「責任とるから行け」とか「とことん行ってこい」っていうこと言われました。（D氏）

#### 2) ASDの母親が子どもと「関係を紡ぐ」経験

##### ①子どもの無関心さや言動に複雑な気持ちにする

このカテゴリは、〔子どもの気遣いのない言動にストレスを感じる〕と〔子どもに昔の自分が重なり複雑な気持ちになる〕という2つのサブカテゴリから構成された。

##### a. 子どもの気遣いのない言動にストレスを感じる

子どもにもASD特性があるケースでは、相手のペースや気持ちへの関心が薄いと感ずるために子どもとの関わり方が難しく、親子でありながら疲れることが語られた。

彼女が自分のことしか興味がない感じなので、私が話を振ったときに全く反応しないことがあるのでストレスになります。（略）前は、聞いてんの？って言ってたんですけど、私もしんどいので今は話し掛けなくて放置しておく感じです。（B氏）

##### b. 子どもに昔の自分が重なり複雑な気持ちになる

子どもに自分と同じ特性があることで共感できる部分もあるが、それゆえに関わり方に躊躇することや、自分自身を見ているような辛い気持ちになることが語られた。

私たち似てる部分あるんですけど。正直、本音みたいな気持ちって話せてないかもしれない。（略）特性からなのか分からないですけど、（子どもは）いろいろやらかしたりするので、距離感がやっぱり物理的にも精神的にもあるんですよ。特性がなかったら普通に怒って、そんなことしたら駄目でしょうって言えるんですけど、結局そういう叱り方や怒ったとしても、怒られたことだけが印象に残る

ので、なかなか駄目でしょうって叱り方もできないのがずっと脳に刻まれてきたので。その辺関係性としてオープンといっても、ちょっと希薄なのかな。(B氏)

②自分の特性で子どもを困らせているかもしれない  
このカテゴリは、[自分のペースは変え難い]と[子どもの心情や状況をイメージするのは難しい]と[子どもを困らせているかもしれない]という3つのサブカテゴリから構成された。

a. 自分のペースは変え難い

母親にとって自身のペースや見通しなどのリズムを保てないことは、ストレスや混乱から心身の疲れとなり、子どもを責めてしまうことが語られた。

やっぱり特性上、ずっと誰かといるのはしんどいんですよ。誰かに合わせるってしんどいのの子育てって子どもに合わせて動くじゃないですか。全部、子どもに合わせて、その間に家事してとかじゃないですか。もうね、苦痛なんです本当に。自分のペースが保てないのが、ずっとしんどかった。(C氏)

b. 子どもの心情や状況をイメージするのは難しい

子どもの言動から自分とは感性が違うと感じるものの、自分の経験にはない子どもの心情や状態のイメージが難しいことが語られた。

言葉で聞いても、あまり(子どもの)気持ちは分からなくて。実際、自分が同じことになったら初めて分かるんやけど頭の中でイメージできやんっていうか。(略)つらそうやなとかは分かるっていうか。説明を本人がして、私は分からんでそうなんやなみたいな感じ。(A氏)

c. 子どもを困らせているかもしれない

気をつけても意図せず人にストレスを与える自分の特性のせいで、子どもを困らせているのではないかと思うことが語られた。

自分の思うようにならないときとか思っと思ったことがちょっと変わると、ごちゃごちゃって、いらってする。時間がかかる。普通に戻るまでに。(家族に)強くなっちゃう、ずっと言っちゃったりします。分かったって言うとなのに言わずにはおれやん。気持ちを抑えられやん。(略)でも、違う情報が入って切り替わるのも早いんで、(子どもは)いろいろな場面でそういうの(切り替え)はやってそう。(A氏)

③自分の頑なさや苦手さよりも、子どもの心を軽く扱わず接する

このカテゴリは、[自分の頑なさを解き、子どもに通じる距離やタイミングを身につけ待つ]と[子どもの特徴やパターンを覚え接する]と[子どもの心の苦しさを軽く扱わず接する]という3つのサブカテゴリから構成された。

a. 自分の頑なさを解き、子どもに通じる距離やタイミングを身につけ待つ

子どもの心の揺れが大きい時期は衝突することもあったが、あえて子どもと距離をとり心に余裕を持つことで、子どもとの関係が穏やかになったことが語られた。

私が子どもたちのことにとらわれて、あれをしなければ、これをしてあげなければって思ってたときは、家のことに思考が100パー占領されてイライラしてた。(略)意外と仕事始めると家から切り離せる時間ができ、菌車がびしっと合った感じです。子どもたちも自分でやるようになったし、私も物理的に距離が離れて自分のことを考える余裕もできたし。全部いいように運んだので、私の態度も柔らかくなって、それが影響して向こうの態度も柔らかくなった。(B氏)

b. 子どもの特徴やパターンを覚え接する

子どもの状態を気にかけて、特性によるイメージの苦手さを補うために自分なりの方法で読み取るよう心掛けていたことが語られた。

大丈夫って言いまくるときほど大丈夫じゃないのは、(略) パターン化してる感じですね。多分、ずっと育ててきてるからっていうのが一番大きい。パターンですよ。 (略) 表情とかを読み取って判断してるわけではないかなっていうのがありますね。(D氏)

c. 子どもの心の苦しさを軽く扱わず接する

子どもが自分や周囲との関りで感じた苦悩を軽いものと扱わずに受け止め、子どもが納得するまで付き合いつづけてきたことが語られた。

子ども以外の家族で笑いながらしゃべってて、自分は勝手に部屋から出てこないだけなのに孤独になったんでしょね。俺なんかいなくてもいいんだって出て行っちゃって・・・私も若いときに同じことを言ったと思って。(略) もし自分と一緒にいたら、寂しくて、自分なんかいても意味がないと思ってんだらうなって予測できたので、そうじゃないよって(メールを)送り続けて。それぐらい傷付くんだって。ちょっと私が大人にならなきゃいけないと。(E氏)

④安らぎのある対等な関係で過ごす

このカテゴリは、[私の特性に合わせ支えてくれる]と[他人には警戒する私たちだが、お互いは安心でき素直でいられる]の2つのサブカテゴリから構成された。

a. 私の特性に合わせ支えてくれる

子どもは、私の特性に伴う特徴や困りごとを支えてくれるようになり、母親と子どもでありながら対等な関係が増えたことが語られた。

今、例えば10代の子たちの相談を受けても時代背景も違うので、いくら私が中学高校時代しんどかったって言っても、今の子たちと状況が全く違うので適切に答えられないことが増えたんです。(略) だから子どもに相談する。子どもたちの年代は特別

支援教育が始まって、特別支援を受けて社会に出る子と私たちみたいにどやどやして社会に放り出されて診断を受ける人って全然違うんです。(C氏)

b. 他人には警戒する私たちだが、お互いは安心でき素直でいられる

親子とも世間の人間関係に疲れることが多いが、お互いに一緒にいる時は素直な自分でいられることが語られた。

仕事が本当に向いてなさ過ぎて、泣きながら毎日。(略) 毎日ちょっと険悪な雰囲気になってます。私がミスして(同僚を)困らせてしまって。(でも、)自然体というか。そのままです。落ち着くというか。子どもらとおるのが一番自分でおれる感じ。(A氏)

⑤子どもの考えや選択を尊重し、社会の中で歩めるよう支える

このカテゴリは、[子ども自身の人生に自信を持って進んでほしい]と[子どもが自律し社会に馴染めるよう、自分の経験をもとに助言する]の2つのサブカテゴリから構成された。

a. 子ども自身の人生に自信を持って進んでほしい

子どもには自分自身の人生を大切にしてほしい願いがあり、親の役割は自分の価値観の押し付けではなく子どもの考えや決断を後押しすることだとの思いが語られた。

私が自分の人権とか価値をずっと否定されて育ったので、それが反面教師というか反発というか。子どもは子どもの人生があるし、私はやりたいこと結構それで諦めて、すごく後悔してるんですね。だから、人生一回きりやから自分のしたいことしたほうがいいので、子どもが留学したい海外行きたい、もういろんな世界に行ついで、私にはできなかったからって。(C氏)

b. 子どもが自律し社会に馴染めるよう、自分の経験をもとに助言する

子どもは人間関係や社会のルールなどの目に見えないことへの苦手さがあるため、気兼ねなく相談できる雰囲気を作り、自分の経験を交えて伝えることが語られた。

(子どもはバイトでのルールを) 律義に守ろうとするから、食い違う意見があった場合に受け止めるのがちょっとしんどいって言ってました。(略)「矛盾だらけや」って。(それで私は)「世の中、職場に1人ぐらいそういう人おるで。今までいくつも職場変わってきたけどおるもんや。生息してるで」。(略) 適当に聞き流しときやいうて。(D氏)

3) 子どもが「育てられた」経験を通してASDの母親と「関係を紡ぐ」経験

①互いの特徴による困りごとを支えあい心の穏やかさを保つ

このカテゴリは、〔丁寧に互いの特徴と対処を伝え支えあう〕と〔特性による母親のストレスを予測し支える〕と〔自分を支えてくれる母親を頼りに心の穏やかさを保つ〕の3つのサブカテゴリから構成された。

a. 丁寧に互いの特徴と対処を伝え支えあう

母親と自分でお互いの特徴を伝えあい、少しずつ理解をしながら補いあっていることが語られた。

細かく伝えるのがいいですね。もう最初から伝えなくていいぐらい伝えてます。そうじゃないと、お母さんが混乱ではないけど、けんかになっちゃうので細かく話します。(略) お母さんには自分がこうなってしまうからこうしてとか、お母さんもこうなるからこうしてとか、そうなっていくと、だんだんこれはこうしたほうがいいっていうのが分かってくる気がする。多分、お母さんの発達障害のことを理解して、お母さんも私の行動とかを理解して、全部言ったりしとるから多分うまく話せたりとか、うまく行動できたりできとるのかな。(a氏)

b. 特性による母親のストレスを予測し支える

母親のASD特性により生じやすいストレスを予測し、先回りして対処し支えていることが語られた。

お母さんが書類整理、苦手なの知ってるので、(略) 多分、普通の人はお母さんが処理や作業しやすいようにやってるんやって捉えると思うんですけど、私にとってはお母さんのストレスになるものを把握してるからすることやと思ってて。多分お母さんはこれをされたらんどくなるやろうな、じゃ、私がやっておいてあげよう、こうやったほうがお母さん取り組むのに気軽な気持ちになれるかなとか。(c氏)

c. 自分を支えてくれる母親を頼りに心の穏やかさを保つ

母親は、友達などとの関わりによる悩みやストレスを気遣ってくれ、自分の気持ちを大事にしてくれるため信頼できることが語られた。

よくお母さんは(私の気持ちを)聞くのかな。だから何かあったときには全部話すし、そういうときお母さんは、少し学校の先生に電話して様子を聞いたりしてくれたから、小さい頃から全部お母さんに相談とかもしとった。あんまり友達にそういう相談はしたくないから。(a氏)

②母親や周りに複雑で心許ない思いがわく

このカテゴリは、〔母親や周囲にとっての自分の存在が気にかかる〕と〔母親のASDゆえの言動に温かな思いと批判的な思いがわく〕の2つのサブカテゴリから構成された。

a. 母親や周囲にとっての自分の存在が気にかかる

母親や周りの人に対し気遣うが、自分の気持ちを分かってもらえた手応えがなく、不信感がわいたり自分の存在を悩んだりしたことが語られた。

私は思春期やし学校は行かんし、でもお母さん仕事に行かなあかんしって、多分すごい忙しかったり悩んだりしたやろうって今は思えるけど、そのときはしんどかった。(略) 学校に行っても先生は久しぶりに私と会ったのに、最近、何してたんって聞くよりも、いつもお母さん(がんばっているね)やんって、私と向き合ってくれる人ほんまに少ないんやなって思った。(c氏)

#### b. 母親のASDゆえの言動に温かな思いと批判的な思いがわく

母親の特性が関連する振る舞いや言動に対し、批判的に感じる反面、自分にはない部分として羨ましさもあるとの反する気持ちが語られた。

お母さんみたいに何でもスルーできるようになりたいとか、何も気付かないようになりたいって思ったりする。(私は) 周りのことを考え過ぎてしんどいんで、お母さんは自分のことで一生懸命に、がーってやってるんで、そういうのを見るとお母さんみたいになりたいって、あんまり周りの目、気にしないような、そこまで気にしないってちょっとあかんけどいいなって思う。(a氏)

## V. 考 察

### 1. ASDの母親の「育てられた」経験に基づく子育ての経験

本研究におけるASDの母親は、自らの親との関係がうまくいかない「育てられた」経験(岩田, 2015; 加藤, 他, 2020)をしていた。そのため、母親は親の子育てを参考にし難く、「自分なり」の子育てをしていた。ASDの母親にとって「育てられた」経験とは、世間から見てちゃんとした人に育てようと手抜きせず関わる親を慕う一方で、自分が大切に思われているのか悩ましく親に頼りがたい経験であった。また、悩ましい思いとは、自分の親を慕

い認められたいが甘えられず、結果として、孤独感や拗ねる気持ちから親に弱みや甘えを見せられないアンビヴァレント(両価性)な思いであったと考えられた。発達障害がある子どもは母親に対しアンビヴァレントな反応を示す(小林, 2017)と言うが、言語化できる大人となった本研究の母親の語りにも表れていると考えられた。つまり、母親は育てられた経験の中でのアンビヴァレントな思いにより、親を子育てのロールモデルにできず、手探りであったとしても「自分なり」を信念とした子育てをしていたと考えられた。

次に、母親は子育てにあたり、実親以外の周りの人々(他の母親, 祖父母, 支援者)を参考にしながら行っていた。Hendrickx/堀越(2021)は自伝の中で「一般的に適切とされる無難な行動とは何かを判断するため、私は他の親をよく観察して、受け答えや意思決定プロセスを確認した。(略) 育児はあまりに抽象的すぎ、不確定要素が多すぎるため、自分では個々の状況を正確に判断することができないからだ」と述べている。本研究の母親も「自分なり」の子育てする背景には、親の子育てに対する反論のような気持ちと同時に、子育てという抽象性が高いことへの苦手さに対するASDの母親ならではの行動があったと考えられた。

### 2. ASDの母親とその子どもが関係を紡ぐ経験の特徴

本研究は、ASDの母親が「育てられた」経験をもとに子どもを「育てる」立場になり「関係を紡ぐ」経験、子どもが母親との関わりから受け止めた「関係を紡ぐ」経験を捉えた。ASDの母親の子育てに関する先行研究は限られており、さらにASDの母親と子どもの関係性に迫った研究は見当たらない。そのため、本研究の結果に基づき、母親にASDがあるがゆえの子どもと紡ぐ関係の特徴を考察する。

まず、ASDの母親が子どもと関係を紡ぐ経験について考察する。母親の子どもと関係を紡ぐ経験は、ASD特性による自分の頑なさや苦手さがあっても、社会での人間関係に疲れやすい子どもに寄り

添い、互いに安心できる関係をつくることと考えられた。母親はASDの特性により、自身のリズムや見直しを変更しがたく、子どもの心情や体調などの状況をイメージすることに苦手さを感じていた。そして、子どもが母親のASD特性に合わせて母親を支えようとすることに、子どもを困らせているかもしれないと気遣っていた。子どもにASD特性がある場合は、自身の過去の思い出が蘇る戸惑いを感じながらも、子どもの言動を軽く扱わず受け止めようとしていた。そして、子どもが社会に馴染めるよう助言しながら、子ども自身が考える将来への選択を強く尊重しようとしていた。

母親が自分の頑なさや苦手なことがあっても子どもを尊重する理由には、2つの経験が関連していると考えられた。一つは、母親自身にASD特性があるために周りの人々との関係で苦悩してきた経験である。もう一つは、親との関係において甘えることができず頼りがたかった「育てられた」経験である。母親は、他者との関係に戸惑う年頃でもある子どもが自分のような経験をしないように、子どもの気持ちを尊重する関係を紡いでいた。このことは、Pohl et al. (2020) や Dugdale, Thompson, Leedham et al. (2021) が、ASDの母親たちは特性に伴う困難があっても子どものニーズを優先し、子どもの自信を高めるために献身的であったと述べていることと類似するものであった。加藤、他 (2020) は、ASDの母親は自身の特性やユニークさを受け入れる余裕を持つことで、子どもの心を思いやる子育てをしていたと述べている。また、上田、石橋、吉川、他 (2020) は、精神疾患がある母親の育児体験の意味について、「必ずしも疾患に悪影響を及ぼしているわけではなく、自己成長を促し自尊感情を高め、疾患受容や疾患管理を含む自己コントロールを高める役割も果たしている」と述べている。本研究の母親も、子どもとの関係を紡ぐ過程を通して自分自身の抱えてきた困難を乗り越え、子どもを守り自分を成長させてきたのであろうと考えられた。

次に、子どもがASDの母親との関係を紡ぐ経験

について考察する。本研究の子どもは、親と互いに支え合うことで心を穏やかに保つと同時に、母親の特性に対する批判的な思いや自分の存在に悩むという穏やかばかりではない複雑な気持ちを経験していた。統合失調症など精神疾患がある母親の子どもは、母親との関りを通して大きな生きづらさを抱える(田野中, 2019; 高坂, 蔭山, 2022)という。しかし、本研究の子どもは、母親に対する複雑な気持ちを持つ一方で、支えられていることも感じており異なる部分もあった。

青年期は、親からの自立と親への依存の間で揺れるアンビヴァレントの様相を示す(青木, 2022)。本研究の子どもも思春期後期から青年期であり、親へのアンビヴァレントな感情を抱えやすい年代であった。しかし、本研究の子どもが抱える感情は青年期ゆえのアンビヴァレントに加え、次のような特徴的な複雑さがあった。それは、母親がASDゆえに抱えやすいストレスに対し子どもが先回りして支え、自身も社会での人間関係による心の負担を支えられるという互いに支えあう安心感である。もう一つは、母親のストレスを予測し支えても、解決せず繰り返される残念さや批判的な気持ちが生じてくることである。

近年、ヤングケアラーといわれる子どもの存在や実態が注目され、支援の充実に向け取り組まれつつある(こども家庭庁, 2023)。ヤングケアラーとされる子どもには精神疾患がある親の子どもは含まれているが、ASDの母親の子どもは状況を明らかにした研究は行われていない。このことから、本研究はASDの母親に育てられる子どもの経験や実状を明らかにする契機の一部になったのではないかと考える。

以上のことから、母親にASDがあるゆえの子どもと紡ぐ関係の特徴は、母親と子どもが互いに相手の苦手さや弱さを理解し支えようとする一方で、親子それぞれに自分の親への批判的な感情を持つ複雑さを抱えていると考えられた。

### 3. ASDの母親とその子どもの関係に対する支援

小林 (2016) は、ASD児のアンビヴァレントを示す様相を「子ども自身の特性として本来備わっているものではなく、母親との関係において生まれ、そして強まっていく」と述べている。本研究のASDの母親とその子どもの経験から、母親は自身の特性による考え方や行動の特徴があるゆえに、子どもを思いやる姿勢へと向かっていた。しかし、子どもは母親の特性に、穏やかばかりではない気持ちになることがあり、両者の関係にはすれ違いがあると推察された。このことから、支援者は母親と子どものそれぞれの特性や特徴だけでなく、置かれた立場に配慮した相談支援を心掛ける必要があると考える。また、母親のASD特性自体は生涯を通して持続することを考えると、母親と子どもが特性とともに生きることを支える (柳楽, 2017) ためには、個々への相談などの支援に加え、母親と子どもが関係を紡ぐための支援が必要と考える。

ASDの母親と子どもの関係を支援するには、両者が抱いてきた経験の意味と理解に注目する必要がある。柳楽 (2017) は、ASD者の支援において、他者に自分の経験を「物語る」ことがこれからの生き方を見いだす行為につながることで、親子の関係性の発達を支えるためには親子それぞれが安心して支援につながる構造を持つことが重要と述べている。McNamee et al. (1997) は「人は他者とともに作り上げた物語的な現実によって自らの経験に意味とまとまりを与え、そうして構成された現実を通して自らの人生を理解し生きる」と述べている。また、「意味と理解は、会話によって言葉を交わす人々の間で構成されていく」とも述べている。つまり、母親と子どもの関係は、親子や親子と関わる人々のそれぞれが多様な見方を語り合うことで新たな意味と理解を生み出すと考える。

そのためには、親子が互いに関心をもち、十分に話を聞き応えることを繰り返す対話が相手を理解する機会につながると考える。また、母親と子どもだけでは閉塞的な思考に陥りがちであるが、母子を取

り巻く家族などの周囲の人々との相互作用や自分自身の内的な対話を通して、母親と子どもが互いに対する多様な見方を得て、より豊かな関係を紡いでいけるのではないかと考える。

### 4. 研究の限界と課題

本研究の研究協力者は、ASDがあり限定的な年齢の子どもを育てている母親とその子どもという得がたい協力者であった。特に子どもの協力者は、母親が子どもの負担を懸念し、了解が得られにくく2名となった。このことから、十分なデータに基づく検討になったとは言いがたい。また、本研究はASDの母親の子育てに焦点を当て子どもの発達障害の有無を特に問わなかった。このことで、母親が語る子どもの多くは発達障害などの健康課題を抱えていたが、ASDの母親と子どもが関係を紡ぐうえで抱える懸念や複雑な思いの現実を見出せたと考える。今後は、ASDの母親とその子どもの相互作用への知見が発展し、特徴を考慮した支援のあり方や方法の提案が望まれる。

## VI. 結 論

ASDの母親は、自分をちゃんと育てようとする親を慕うが、弱みや甘えを見せられない「育てられた」経験をしていた。そのため、母親は「自分なり」を信念とした子育てをしていた。母親と子どもが紡ぐ関係の特徴は、互いに相手の苦手さや弱さを理解し支えようとする一方で、親子それぞれに自分の親への批判的な感情を持つアンビヴァレントで複雑さを抱えていた。母親と子どもが関係を紡ぐためには、従来からの支援に加え、親子と親子に関わる人々との対話により、多様な見方と互いに理解を深める支援が必要と考えられた。

### 謝 辞

本研究にご協力いただきました母親と子どもの皆様に深く感謝申し上げます。なお、論文に関連する企業・団体等との利益相反はない。

## 各著者の貢献

MKは研究の着想から論文執筆のプロセス全体に責任をもち行った。AKはデータ分析と解釈および原稿への示唆など研究プロセス全体への助言を行った。著者らは最終原稿を読み、承諾した。

〔受付 23.06.16〕  
〔採用 24.02.06〕

## 文 献

- 青木きよ子：成人看護学概論ナーシンググラフィカ成人看護学①（第5版），33，株式会社メディカ出版，大阪，2022
- 浅井朋子，杉山登志郎，小石誠二，東 誠，遠藤太郎，大河内 修，海野千畝子，並木典子，河辺真千子，服部麻子：高機能広汎性発達障害の母子例への対応，小児の精神と神経，45(4)，353-362，2005
- Brugha, T. S., S. McManus, J. Bankart, F. Scott, S. Purdon, J. Smith, P. Bebbington, R. Jenkins, H. Meltzer: Epidemiology of Autism Spectrum Disorders in Adults in the Community in England, *Arch Gen Psychiatry*, 68(5): 459-466, 2011
- Centers for Disease Control and Prevention (CDC): Prevalence and Characteristics of Autism Spectrum Disorder Among Children Aged 8 Years — Autism and Developmental Disabilities Monitoring Network, 11 Sites, United States, 2018, *MMWR Surveillance Summaries*, 70(11): 1-16, 2021
- Dugdale, A. S., A. R. Thompson, A. Leedham et al.: Intense connection and love: The experiences of autistic mothers, *Autism*, 25(7): 1973-1984, 2021
- グレッグ美鈴，麻原きよみ，横山美江：よくわかる質的研究の進め方・まとめ方（第2版），35: 80-82，医歯薬出版株式会社，東京，2018
- Hendrickx, S. / 堀越英美：自閉スペクトラム症の女の子が 出会う世界—幼児期から老年期まで—，269，河出書房出版社，東京，2021
- 飯田法子，佐藤晋治：自身が高機能広汎性発達障害をもつ 母親の「愛情」からみた育児支援—「内的作業モデル測定 尺度」と「語り」による4事例の報告—，別府大学短期大 学部紀要，32: 95-106, 2013
- 岩田千亜紀：高機能自閉症スペクトラム障害（ASD）圏の 母親の子育てにおける困難とニーズ—当事者に対する質 的研究に基づく分析—，社会福祉学，56(3): 44-57, 2015
- 加藤まり，門間晶子，山口知香枝：知的障害を伴わない自 閉症スペクトラム障害（ASD）がある母親の子育て—中 学生までの子どもを育てる経験—，日本看護研究学会雑 誌，43(2): 163-175, 2020
- 小林隆児：甘えたくても甘えられない—関係臨床のコツ， 西南学院大学人間科学論集，11(2): 147-171, 2016
- 小林隆児：自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み 解く—関係発達精神病理学の提唱—，31-39，ミネルヴァ 書房，京都，2017
- 高坂日由香，蔭山正子：精神疾患の親を持つ子どもが成人 後に認識した生きづらさとその要因に関する質的記述的 研究—統合失調症圏の母親に関して—，日本看護科学学 会誌，42: 726-734, 2022
- 厚生労働省：発達障害の理解—メンタルヘル스에配慮すべき 人への支援—。 <https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000633453.pdf>. (2024.2.10 閲覧)
- 子ども家庭庁：健やか親子21—妊娠・出産・子育て期の健 康に関する情報サイト—。 <https://sukoyaka21.cfa.go.jp/>. (2024.2.10 閲覧)
- 子ども家庭庁：ヤングケアラーについて。 <https://www.cfa.go.jp/policies/young-carer/>. (2024.2.10 閲覧)
- McNamee, S., K. Gergen / 野口裕二，野村直樹：ナラティヴ・セラピー社会構成主義の実践，43-64，遠見書房，東京，1997
- Milner, V., H. McIntosh, E. Colvert, F. Happe: A Qualitative Exploration of the Female Experience of Autism Spectrum Disorder (ASD), *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 49: 2389-2402, 2019
- 日本小児看護学会：子どもを対象とする看護研究に関する 倫理指針，2015
- Pohl, A. L., S. K. Crockford, M. Blakemore, C. Allison, S. Baron-Cohen: A Comparative Study of Autistic and Non-Autistic Women's Experience of Motherhood, *Molecular Autism*, 11(1): 1-12, 2020
- Saito, M., T. Hirota, Y. Sakamoto, M. Adachi, M. Takahashi, A. Osato-Kaneda, Y. S. Kim, B. Leventhal, A. Shui, S. Kato, K. Nakamura: Prevalence and Cumulative Incidence of Autism Spectrum Disorders and the Patterns of Co-Occurring Neurodevelopmental Disorders in a Total Population Sample of 5-Year-Old Children, *Molecular Autism*, 11(1): 35, 2020
- Sasayama, D., R. Kuge, Y. Toibana, H. Honda: Trends in Autism Spectrum Disorder Diagnoses in Japan, 2009 to 2019, *JAMA Netw Open*, 4(5): e219234, 2021
- 田野中恭子：精神疾患の親をもつ子どもの困難，日本公衆衛生看護学会誌，8(1)，23-32, 2019
- Taylor, J. L., L. S. DaWalt: Working toward a Better Understanding of the Life Experiences of Women on the Autism Spectrum, *Autism*, 24(5): 1027-1030, 2020
- Tint, A., A. J. Weiss: A qualitative study of the service experiences of women with autism spectrum disorder, *Autism*, 22(8): 928-937, 2018
- 上田明美，石橋照子，吉川洋子：精神疾患を有する母親の 育児体験の意味，日本看護研究学会雑誌，43(1): 51-62, 2020
- Webster, A. A., S. Garvis: The importance of critical life moments: An explorative study of successful women with autism spectrum disorder, *Autism*, 21(6): 670-677, 2017
- Wing, L. / 久保絃章，佐々木正美，清水康夫：自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック，28-78，東京書籍，東京，1998
- 柳楽明子：高機能自閉症スペクトラム障害者の思春期を支える心理的支援，心理臨床学研究，35(3): 233-243, 2017

## Relationships Weaved Through the Experiences of Mothers with High-Functioning Autism Spectrum Disorder (ASD) and Their Children Being “Raised by Parents” and “Raising Children”

Mari Kato<sup>1) 2)</sup> Akiko Kadoma<sup>3)</sup>

1) Kinjo Gakuin University Faculty of Nursing

2) Graduate School of Nursing (Doctor's), Nagoya City University

3) Graduate School of Nursing, Nagoya City University

**Key words:** high-functioning autism spectrum disorder, mother's and children's experiences, parenting, weaving a relationship

The study aimed to explore the experiences of mothers with high-functioning autism spectrum disorder (ASD) and their children in terms of being “raised by parents” and “raising children,” while also examining the ASD-associated characteristics of the mother-child relationships. Semi-structured interviews were conducted with five mothers with ASD and two of their children. We identified the following four key categories related to the experiences of being “raised by parents” and “raising children” : 1) Parents’ attempts to raise them properly, 2) Challenges in relying on parents, 3) Raising their children in their own way, and 4) Similarities between mothers and grandparents. Further, we identified the following five categories related to mothers’ experiences of “weaving relationships” with their children: 1) Mixed feelings toward children’s behavior and indifference, 2) Self-reflection on the impact of personal characteristics on children, 3) Balancing parenting with personal traits and challenges, 4) Equal and peaceful interaction, and 5) Respecting children’s autonomy and supporting their success. The children’s experiences of “weaving relationship” with their mothers were grouped into two categories: mutual support in coping with each other’s challenges and complex emotions toward the mother and surroundings. The relationship between mothers with ASD and their children was ambivalent and complex, characterized by mutual care, support, and self-criticism. To effectively support these relationships, traditional support should be complemented with diverse perspectives and enhanced mutual understanding, involving open dialogues with these mothers and relevant stakeholders.